

保育への視座(7)

——若い保育者の方々へ——

河邊　呆

どのような感情の表現も、これを敏感に傾聴し、これを適切に育てようとしているだろうか

この課題は私が幼児教育にかかわって以来一層強く持ちつづけて来ているものであるが、ここ二年間、実際保育を中心とする研修会にのぞんで、このことが幼児の教育の多くの問題の中でも一番にあげたい問題ではなかろうかと思

う。このように言ふと、既に心情の教育として音楽リズムや造形的表現やその他ことばなどによる表現活動の指導を中心として充分過ぎる程、実践しているとどこからか答えが返ってくるようにも思う。また、日常の敵意や攻撃的な怒りや、嬉しいこと、淋しいこと、悲しい思いなどが素直に表現できるよう受けとめられ適正に助言されているだろうかと言うと、多くの幼稚園ではむしろそれは、基本的な生活指導（特

にしつけと称して) などで指示、命令、説得等によりきちつと指導しているという答えが再び返つて来るようだ。このような教育内容や方法という従来の教育機能で既に教育されていることになっているのだが、果たして眞に人間に性にかかわる教育が全うされているといえるのだろうかという課題である。

特に感情、情緒にかかわることときかれると、保育者にとっては一番苦手にされていて、できれば「わからない」「むづかしい」の一言で避けたい気持ちにならぬのではなかろうか。また何時までたつても形式的な保育から脱皮できないで来た人間教育の根本にかかわる重要な課題ではなかろうかと思う。

新しい年を迎えて新鮮にこれを受けとめ、でるべきだけ早い時期に研修を深めていってほしいという願いからこの課題をとりあげて見た。

次に紹介する実践記録はK市のM幼稚園のK先生(昨年四月に新規採用になられた新任)の報告によるものである。

それは三歳児のひろや(男)とめぐみ(女)との関係に担任としてかかわられた時のもので、ひろやは素直であるが、自分の気持ちをうまくことばで表現できないでつい手や足が先に出てしまう子どもで、担任としてもどう指導したらよいのか気にされていた子どもである。

*

九月〇日 運動会の前日の帰りの会で、みんなに「明日は何の日かな。わかる?」と聞くとすかさずめぐみが「うんどうかい」といった。するとひろやが突然立ちあがり、めぐみに向かって飛び蹴りをくらわせてしまった。

私は一瞬何でことを……と思ひあせりましたが、すぐにひろやに「先に言われて悔しかったの?」と笑顔で聞くと、こちらを向いてにこりと笑いながら

「うん」とうなずいて元のところに座りました。そしてめぐみにも「ひろやくんはめぐみちゃんに先に言われて悔しかったんだって」と言うと、「なんだと言つて笑つていました。何時もの私なら、すぐにひろやをとり押さえるようにして「どうしてそうやつて人を蹴つたりするの?」と言いながら目をつりあげていたと思う。この日のこの時はなぜか、ひろやの悔しさのよくなものが伝わって来たので何時もの態度と違つた接し方をしたように思う。何時ものようになつて蹴つてしまつたのだろうかなどとは考えませんでした。

このようにすんなりと納得して落ち着いてくれたのは初めてだったので驚くと共にとても嬉しく思つた。これからもひろやの気持ちに添うように接していくことを思いました。

*
と。この記録を読まると新任という経験の浅い先生がよくここまでと思われるかも知れませ

んが、このK先生もすつとこのような態度がとれるようになられたのではないことを申し添えなければなりません。

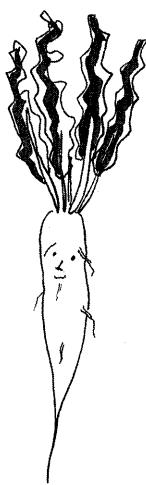
それは同じクラスの三歳女兒かなについてのかかわりの苦労があつたことです。

かなは四、五、六月頃までは手のかからない子どもとしてK先生の目には映つていたようで、六月中旬、通称「おたふく風邪」で二週間程休んだあと久しぶりに登園して来た時以前と全く変わり、登園を嫌がつて、泣きながら登園してからも「お母さん」と言つて大泣きをする

と共に担任に対しては避けるような態度を示した。ただかなにとつて救いの手は園長先生だけがお気に入りで、常に園長先生のうしろに隠れ担任に対して嫌そな顔をして時に泣き出すこともあつた。どうしたらよいのだろうかと毎日毎日悩んだと言われる。そこで担任はついに「先生は嫌いなの」と聞いてみると何の反応も

しなかつたが、次の日一枚の絵を持って来て担任に手渡した。みると担任を描いた絵に母親の字で「先生大好き」と書いてあって、昨日担任が尋ねたことを家で母親に話をしたのだと思いきや、うれしくてたまらなかつたということです。その日から担任を避けなくなつたようである。しかし避けなくなつたのはよいが担任とかなは一対一でないと駄目で少しでも気に入らないと園長先生のところへ行つてしまふようになり、担任の目には「なんとわがままな子なんだろう」と思えるようになつてしまつた。この状態のままで夏休みに入ったので二学期のことが心配になり悩み続けていたと言っていた。丁度その夏休みに二泊三日の姉妹園との合同の園内研修会が行われて、K先生も同僚の先生方と参加された。

私もその時招かれて参加してこの事例に出会うことができたのである。その時、かなについ



て「わがまま」なのだろうか、自分の思いを表出し、表現できるようになりつつある過程のひとつ姿のあらわれではないだろうか、ということにはっと気づかれたようである。つまりかなが担任を独占したいようにあるまうのは、四、五、六月と「ひとりで遊べるからいい子」と安心して、きっと担任自身が心から接してあげられなかつたのではと省察され、しかも、「わがまま」という評価をしてしまつていたこと、子どもの「いま、ここ」のあるがままを

しっかりと受けとめていくことの不充分さに目、うろこが落ちる思いをされたようである。こうした体験のあと、二学期を迎えた九月のかなや、ひろやとの出会いとかかわりになったのである。かなについても担任のかなをはじめとする子どもひとりひとりへの感じ方、見方の変化やその心の変化によって、かなが変わったのだとは言えないが、かな遊ぶ姿をみてうれしく思っているという報告を聞いている。

ここでK先生の報告からさらに付加すべきことがある。それは、その宿泊研修の前に別のところで新規採用教員のための研修会が開かれてそれにも参加されていて、その時のことを含めて次のように報告されている。

*

その会では、「同じような悩み」というようにひとまとめにしてとらえられ、おおまかにしか意見を言つてもらえないのをいまいち納得がいかないまま

終わってしまった。しかし、合同の園内研修会ではとても親身になつて一生懸命に聞いて考えてもらえて驚いてしまつたくらいで……とても気分がすつきりとした状態で終わることができた。特に嬉しかったのは、かなへの感じ方見方を変えることができたことである。

*

ここで自分の悩みをそつとしまつて置かないで、思い切って先生方に聞いてもらうことの大しさと、こうしたふんいきの研修会への積極的な参加こそ保育者自身の感情をみつめ、同時にそのことによって子どもの感情表現を育てる保育になることを身をもつて体験されたことをここに紹介し、今後この課題にとり組む心構えにしてほしい。

(元・洗足学園短期大学)